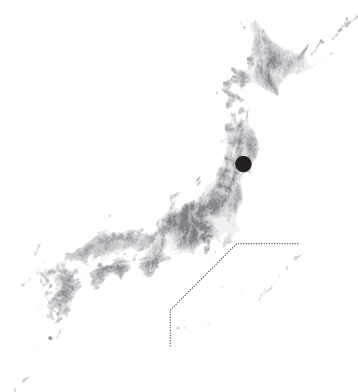


【東北】

山田集落における自然学校の取り組み

～自然と共生する持続可能な地域社会に向けて～



地 域：宮城県栗原市山田集落

実施主体：くりこま高原自然学校

報 告：くりこま高原自然学校 唐澤晋平

1. はじめに

生物多様性の保全や循環型社会への関心が高まるにつれて里山や農山村の暮らしが持続可能な社会のモデルとして注目されるようになりました。くりこま高原自然学校・松倉校の活動する山田集落は典型的な東北の農山村で、江戸時代から残る自然と共生する暮らしやお金を介さない結いの精神がいまだに残っています。そうした山田集落での自然学校の取り組みを紹介し、その社会的意義や地域への影響、活動を進める上での課題について現場の目線から報告します。

2. 活動の経緯

くりこま高原自然学校は1996年に宮城県栗駒の山奥・耕英地区に野外教育事務所として開設しました。栗駒山の豊かな自然環境を活かし、青少年の健全育成を図る長期キャンプや栗駒山のガイドなど様々な自然体験活動を提供してきました。また不登校・引きこもり・ニートなどの自立支援を行う寄宿制度や幼児期の自然体験活動「森のようちえん」など、次々と浮かび上がってくる社会問題に対応しながら様々な事業を展開してきました。

しかし2008年6月14日に岩手・宮城内陸地震に被災し、施設は大きな被害を受け耕英地区全体が避難指示の対象地区となりました。退去を余儀なくされた私たちは一時的に活動の拠点を失い、事業も停止状



くりこま高原自然学校松倉校遠景

態に陥りました。そんな折に空き家があるから使わないかという話を頂き、2008年7月に農村の民家を借り受けて松倉校として活動を再開しました。それまで活動してきた耕英地区は戦後の開拓地のため周りは荒々しい原生林や源流であったのに対し、松倉校は田んぼや山に囲まれた伝統ある農山村の拠点でこれまでとは全く違った環境での再スタートとなりました。紹介する取り組みの舞台である山田集落は松倉校の奥へ1kmほど入ったところにあります。集落の方は私たちが被災したことを知っていたため移った当初から色々と面倒を見ていただき、徐々に交流が生まれるようになりました。震災直後は復興活動で奔走していましたが、徐々に落ち着くにつれて松倉校をひとつの活動拠点として利用して農山村の地域資源を活かした事業を行えないかという話を持ち上がり、山田集落を中心にした取り組みが始まりました。

3. 活動内容と地域への影響

一口に地域といってもどれほど範囲を指すのかは様々ですが、山田集落の場合は半径1km内に13世帯46名が暮らしているだけの非常に狭い範囲の地域です。高齢化・過疎化が進んでいるのは他の農山村と同様ですが、道や棚田は綺麗に手入れがされており美しい景観が保たれています。

自然学校としてはそうした環境を活かしてキャンプやツアーなど様々な活動を行う構想がありますが、外部からやってきた団体が地域で活動するためには何より住民との信頼関係を築くことが最優先でした。お互いに顔が見えない状態からのスタートでしたが、一軒一軒あいさつに回り地域の集会や草刈などの共同作業に継続して参加したことで私たちのことを少しずつ理解していただけるようになりました。そしてフィールド調査や住民とのやりとりから豊かな自然環境や歴史、文化といった山田集落の地域資源が浮かび上がってきました。何より驚かされたのは地域のおじいちゃん・おばあちゃん達の暮らし方でした。畑仕事に山仕事、無いものは作り壊れたものは直してしまう手仕事、季節に応じてたくさんの山菜やきのこを集めて来ます。集会があればみんなで季節の料理を持ち寄るのでお金をほとんどかけることはありません。昔は結婚式やお祭りも集落が一体となって行っていたそうで、そうした「よいっこ（結いっこ）」と呼ばれる助け合いの精神は未だに強く残っています。山田集落は400年以上前から存在していた記録が残っていますが、70代・80代の方々の暮らしには江戸時代から受け継がれてきた知恵がそのまま残っているようでした。持続可能な社

会づくりにおいてキーワードになっている地域自給、地域循環、自然との共生、コミュニティといった要素は全てこの小さな集落に具体的な形で存在しています。こうした暮らしはESDの最高の教材であり、それを発信していくことが松倉校の役割として浮かび上がってきました。

2009年度はこうした地域資源を活かして小中学生向けキャンプを開催しました。夏休みは8月16日～23日（7泊8日）の日程で開催し、仙台市を中心に小学生15人が集まりました。また冬休みは12月26日～30日（4泊5日）の日程で21名が参加しました。キャンプでは子ども達が農山村の自然や文化に親しみ持続可能な暮らしを体感できるように昔の遊び場所や暮らしについてあらかじめ聞き取りを行って、それを元にプログラムを企画しました。たとえば昔使われていた道をハイキングコースとして利用したり、ランプの明かりで生活していた暮らしになぞらえてキャンドルナイトを実施したりしました。しめ縄づくりやもちつきといったプログラムは地域のおじいちゃんに講師をお願いし、本物の技に触れられるようにしました。都市で育った子ども達にとって何でもこなしてしまう元気なおじいちゃん達との交流はとても印象的だったようです。地域の方からも子どもたちとふれあったことは非常に大きな反響があり、「数十年ぶりに集落に子ども達の声が響いて昔を思い出した」「疲れるどころかかえって元気をいただきました」との声をいただきました。また普段当たり前だと思っていた星空や田んぼに子どもたちが驚きの声を上げている姿を見たことは地域に誇りを感じる機会にもなりました。

子どもだけでなく大人への発信も行いました。東北



伝統的なはざがけ「ねじりほんによ」



冬のキャンプの様子

環境教育ミーティング（2009年10月23日～25日）やみやぎグリーンツーリズム大会inくりはら（2009年12月3～4日）といった場で山田集落を巡る分科会を企画しました。地域のおじいちゃんにガイドをお願いし、山神さまや水神さま、小さな不動様や馬頭観音などを説明しながら集落の成り立ちや文化を詳しく解説していただきました。キャンプでも同様ですが、こうした外部との交流は参加者にとって農山村の文化や暮らしを学ぶ場になるだけでなく地域住民にとっても地域の価値を見直すきっかけとなりました。

外部への発信と平行して、私たちは山田集落の2つの課題と向き合わなければなりませんでした。ひとつは高齢化・過疎化というコミュニティの衰退、もうひとつは里山の荒廃や耕作放棄地の増加という自然環境の衰退です。

高齢化・過疎化の背景には田舎には仕事が無く若者が暮らしていけないという現状があります。働き口が少ないため若者は都市部に流出し、人口の減少によってさらに地域経済が落ち込んでいくという悪循環が起きています。山田集落を見ると暮らしているのは50代～80代でその下の世代はほとんど仙台や東京に移っています。今はまだ集落として保たれていますが10年後20年後を見据えると現状のままでは地域として持続できないことは明らかです。この問題は山田集落に限られたものではなく、栗原市全体で見ても2005年の合併時には8万2千人いた人口が、2010年1月の時点で7万7千人代に落ちこんでいます。

もうひとつの課題である自然環境の衰退は戦後にライフスタイルが大きく変化したことが影響していま

す。山田で聞き取りを行うとほんの数十年前まではどこの家もかまどでご飯を炊き薪でお風呂を沸かし、落ち葉を集めて堆肥を作っていたそうです。農業機械の出現する前は農耕馬をどこの家でも飼っており、草刈は今のようになる作業ではなくエサを確保するための重要な仕事でした。しかし石油やガスが使われるようになり、農業も機械化が進むことで暮らしと目の前の自然のつながりは絶たれてしまいました。里山に入る必要性が無くなったため木は伸び下草が生えて暗い森が増えました。あるおばあちゃんは「昔はもっとキノコが取れたんだけどね。」と語ります。

山田集落を含め伝統ある農山村はESDという観点からも生物多様性という観点からも非常に重要であるにも関わらず、今まさに消滅の危機に瀕しています。そうした現状を受けて私たちは山田集落を中心に3年間のプロジェクト（セブン・イレブンみどりの基金の助成事業）を開始しました。このプロジェクトの目的はこの地域の資源を活かして自然と共生する持続可能な地域づくりを行うことです。初年度は石窯の製作や交流会、パン教室の実施、炭焼きのイベントなどに取り組みました。さまざまな取り組みの中で最も集落への影響が大きかったのは地元学ワークショップの実施でした。地元学ワークショップは地域外の人間が地元住民にさまざまなことを教えていただき、それをまとめていくことで地域の魅力を見直すという地域づくりの手法です。ないものねだりをせずに地元にあるものを探そうという主旨で11月の3連休に開催しました。自然学校スタッフや学生ボランティア10名ほどが聞き役に回り、地元のおじいちゃん・おばあちゃんたちに季節の野菜作りや保存食作り、歴史、信仰など様々



（地元学ワークショップ）地域の方に地域のことを教えてもらう



（地元学ワークショップ）地域について学んだことを発表

なことを教えていただきました。教えていただいた内容は全て写真とメモをとり、模造紙にまとめて最終日に住民へと発表会を行いました。10数名のおじいちゃん・おばあちゃんが集まり発表を熱心に聞いていました。ねじりほんによと呼ばれる伝統的な稲の乾燥法を続けている方は「今まで当たり前だと思ってやってきたけど、これだけ良いつて言ってもらえんならやっぱ良いものなんだなあ」と感想を漏らしていました。また89歳の長老からは「みなさまのおかげで古いものが新しく生まれ変わったように思います。本当にありがとうございました。」との言葉をいただきました。実施に当たり協力をいただいた民生委員の方からは、「今までにいろいろ高齢者教室のようなことをしてきたけど、発表を聞いている皆さんの表情がいつもと全然違う。自分たちのことだからよっぽど嬉しかったんでしょね。」との感想をいただきました。

当初は自然学校と山田集落の間だけで始まった小さなプロジェクトでしたが、一年間さまざまな動きをしていく中で徐々に他の地域づくり団体や行政から関心や協力をいただけるようになりました。取り組みを知った宮城県北部地方振興事務所の方からこの地域の里山を利用して薪の販売やツーリズムを行えないかといった打診を受けました。また地元学ワークショップでは栗原市の田園観光課に声をかけ職員にもご参加いただきました。それがきっかけとなり田園観光課からも山田集落に関心を持って頂けるようになり2010年2月に東京で行われた栗原市のPRイベントでも山田のお米を紹介していただきました。

5. 活動を進める上での課題

山田集落での活動の特徴は2つあります。一つ目は行政でもなく地元住民でもなく完全なよそ者のNPOが主体となっていること、二つ目は非常に狭い範囲の地域で活動を進めている点にあります。こうしたケースでは私たちの考えと住民の考えの間にあるギャップをどう埋めるか、限られた地域の中でどうやって一人ひとりの住民の意識を高めていくかということが大きな課題になります。山田集落の場合も私たちの思いに共感し積極的に協力していただいている住民は7~8名程度で、その他大多数の住民からは十分に理解をいただけていないのが現状です。

私たちのような「外の視点」から見ると非常に価値のある里山や棚田は地元の方にしてみれば見慣れた日常でしかありません。ですから私たちがいくら熱心にその重要性を呼びかけたところで住民の心には響かないことが往々にあります。また開発や埋め立てといった緊急性の高い具体的な問題が存在しているケースでは活動の目標も提示しやすく意識や行動も変えやすいのですが、農山村における生物多様性保全のように徐々に進行して行く抽象的な課題の場合はその価値や活動のゴールを共有することが困難です。

このようなケースでは地域住民一人ひとりとの丁寧に対話しながら私たちの思いと地域住民の思いの接点を見つけだしていくプロセスが必要でしょう。たとえば生物多様性を守るために里山保全をしたいという私たちの思いがあっても、そのままの言葉で地域の方に話したところで賛同をいただくことが非常に難しいです。しかし住民とのやりとりのなかから「最近山の木



東北環境教育ミーティング分科会の様子



地域との意見交換会

が伸びて見苦しい」といった悩みが出てくれば、その場所を整備することで地域も私たちも思いを満たすことが出来ます。よそ者が中心となって事を進める場合、住民の意識を高めた上でいきなり大きな活動を行うよりも、地域の思いに寄り添いながら実践できる活動から始め、そのプロセスの中で少しずつ意識を高めていく方法をとるほうが進めやすいのではないかと考えています。理念や理屈を説くだけではなかなか伝わりませんが、実際に耕作放棄地が綺麗になる様子や都会から来て景色を写真に撮っていく方々の様子を見れば住民も気づきがあるはずです。こうした地域づくりを可能にするためには実際に地域に入り住民と丁寧な対話を重ね、具体的な形で行動に移していく人材が必要となります。国の進める集落支援員や田舎で働き隊、地域おこし協力隊といった制度がそうした機能を持つでしょうが、単に地域づくりという観点だけで活動するのではなくESDや生物多様性といった考え方も持つことは重要でしょう。

住民との意識付けと別の課題として、経済的な事情があります。私たちのような民間団体は黙ってお金が入ることは無いため、いかにしてこの取り組みを事業として成り立たせるかが活動を継続していく上で重要なポイントになります。地元学や生物多様性の保全といった活動はどれほど行ってもそれ自体が私たちの収入や地域の雇用創出につながることはありません。今は助成金をいただいているのでフルタイムで活動に取り組むことが出来ますが、助成が無くなった後にも継続して活動を進めるには会員確保や特産品の開発、キャンプ・エコツアーの実施など私たちにも地域にもお金が落ちる仕組みを作る必要があります。山田集落での取り組みはまだ仕組みを作る段階まで達していませんが、常に事業化を意識しながら活動を進めています。

6. 今後の取り組み

今後の展開について話し合うために、2010年2月24日に地域住民と意見交換会を行いました。自然学校スタッフ6名、関わりの深い地域住民7名が集まり、さまざまな課題と魅力を持つこの集落で一緒に何が出来るかを話し合い次のような意見・アイデアが出ました。

●悩み、課題

- ・仕事が無く若者が流出する
- ・耕作放棄地の荒廃
- ・若い世代は伝統に関心が無く、文化が失われていく

●希望、提案

- ・山田のファンを増やし、お米や集落自体をブランド化できないか
- ・昔使われていた馬の街道を整備しハイキングコースにしたら面白い
- ・都会に疲れた人向けに草刈り体験などをしてもらえばお互い助かる
- ・今は塞がれている昔の水飲み場を使えるようにしてはどうか
- ・山田集落のマップを作って立ち寄った人が散策できるようにしたい
- ・眺めのいい棚田の上で季節に応じた交流会をしてはどうか
- ・地域で米ぬか石鹸づくりを行い環境意識を高める
- ・ほだ木を取って楽しみながら里山整備につなげよう

住民の思いと私たちの思いをすり合わせながら実行可能なアイデアをまとめていきました。しかし一方で住民間の温度差があるため地域全体が一丸となってひとつの目標に突き進むような進め方は難しいだろうとの意見も出ました。そこで耕作放棄地の整備など様々な取り組みを目に見える形で重ねながら、徐々に地域内外の多くの人の関心を集めて巻き込んでいくという進め方をとることにしました。現在は今後の活動計画を具体的に詰めている段階です。

東北で様々な地域づくりに関わる民俗学者・結城登美雄氏は「地域はぐずぐずとしか変わらない」と語ります。山田集落もやはり同じで、私たちが1年や2年活動したところで劇的な変化は生まれないでしょう。しかしそれは責められるべきことではなく、むしろそうした保守的な姿勢があったからこそ伝統が残り続けてきたのです。少しずつしか変わらないことにあせることなく、地域に寄り添いながらぐずぐずと活動を進めて行きたいと思います。